

「主イエスを殺害する計画と裏切りを企てるユダ」

2022年05月27日

さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、どのようにイエスをだまして捕らえ、殺そうかと謀っていた。彼らは、「祭りの間はやめておこう。民衆が騒ぎ出すといけない」と話していた。（マルコ福音書14章1節～2節）

十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長たちのところへ出かけて行った。彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかと狙っていた。（マルコ福音書14章10節～11節）

エルサレム神殿当局は、主イエスを殺す計画を動かぬものとして決意した。彼らは、主イエスがガリラヤで神の国の宣教を始めた頃より、自分たちの作り上げた律法による宗教体制に逆らうものとして、注視していた。主イエスの神の国の宣教は、どんな人も神の祝福を受け、生きることを絶対的に是認されているという福音であった。今日の言葉で言えば、生きる権利を保障し、命の尊厳を護り抜くというものであった。主イエスの説く福音は神殿当局にとっては、既成の宗教体制を壊す、許し難いものであった。安息日を軽視するとして、殺害の機運は高まるばかりであった。更に、神殿で商売する人々に暴力的に振る舞った行為は神殿の権威を著しく傷つけた。主イエスを殺害する計画は決定的になっていった。しかし民衆は、権威を恐れぬ主イエスの真実な言葉と業に共感し、賛同と尊敬を表していた。神殿当局は主イエスの殺害の機会を狙っていたが、過越祭が間近に迫っていて、大勢の参拝者がやって来ていた。民衆の反感を買うことを恐れて、彼らは歯ぎしりしながらも、「祭りの間はやめておこう。民衆が騒ぎ出すといけない」と話していた。

そのような緊迫した状況の中、好都合な事態が起こった。イスカリオテのユダが、主イエスを引き渡そうとして、祭司長たちの所にやって来た。彼らは喜び、金を与える約束をした。この時から、ユダはどうすれば主イエスを引き渡すことができるかと機会を狙うようになった。マタイ福音書は、祭司長たちと約束した引き渡しの金額は、銀貨30枚であったと記している。ユダは、主イエスから「これと思う人々」の一人として弟子に選ばれた人である。彼は初めから主イエスを引き渡す役目を負う者として、弟子にされたという説もあるが、そうではないだろう。彼も、主イエスの言動に心酔し、喜んで弟子になり、彼なりに懸命に仕えていたと思われる。その彼がなぜ引き渡す者となったのか。

聖書から、ユダの裏切りの動機に関し、三つの動機が考えられる。一つは、金目当てである。ヨハネ福音書では、マリアが高価なナルドの香油を主イエスに注ぎかけた時、貧しい人に施すことができるのにと、正論を吐いているが、会計の役をしていたユダは中身をごまかそうとしていたと記している。また、銀貨30枚（30日分の賃金）で引き渡すことを約束していることから金銭欲が強かったと受け取れる。第二の動機は、主イエスに従う中で、様々な会話から感情的にじっくりこないものが生じていったと想像される。また、弟子たちの仲間からユダは信頼され一目置かれてはいたが、彼はいつも孤独であったようだ。仲間との感情的な行き違いから、引き渡す思いに駆られていった。三つ目の動機は、主イエスが示したキリスト像とユダが求めたキリスト像の違いである。彼は、主イエスにローマからの解放をもたらすキリストを期待していたが、主イエスは神殿当局によって殺される無力な人であることを知った。その時、自分の身の安全のためにも、引き渡そうと決心した。ユダの心は闇であるが、その闇が裏切りに走ったのである。